黄色い河口

22の小さな物語

inoue mitsuharu

井上光晴

黄色い河口

22の小さな物語

井上光晴

岩波書店

黄色い河口
一九八四年四月二三日　第一刷発行©
定価一四〇〇円
著者　井上光晴
発行者　緑川亨
発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社　岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六四〇
印刷・理想社　製本・牧製本
落丁本・乱丁本はお取替いたします
Printed in Japan

目次

小籠湯包・・・・・・・・・・・・・1
旅役者たち・・・・・・・・・・・・11
鱶・・・・・・・・・・・・・・・21
士官さんの家・・・・・・・・・・・27

ナナメ・・・・・・・・・・・・・・37
少年よ大志を抱け・・・・・・・・・49
飛車・角落ち・・・・・・・・・・・57
寺島水道・・・・・・・・・・・・・69
工作艦シルバータートル号の運命・・79
長崎特番・・・・・・・・・・・・・91

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

金鵄勲章・・・・・・・・・・・・・・・101
詩人・・・・・・・・・・・・・・・・・111
待たれる男・・・・・・・・・・・・・・123
核シェルター・・・・・・・・・・・・・133
エンタープライズ・ルーレット・・・・・141
道鏡のズブロツカ・・・・・・・・・・・151

昌子・・・・・・・・・・・・・・・159
ドームの奇蹟・・・・・・・・・・・・・169
にくてんの秋・・・・・・・・・・・・・181
何でも相談室・・・・・・・・・・・・・193
女郎屋の話・・・・・・・・・・・・・203
青い郵便船・・・・・・・・・・・・・215

小籠湯包

シャオロンタンパオ。平たくいえば、スープ入りの肉饅だ。食べるとぴゅっと熱い汁がでて必ず舌を焼く。小さな蒸籠に五つ、白菜を下敷きに並んでいて、蓋を開けた途端に、揚子江みたいな匂いがした。揚子江というのはむろんあてずっぽうである。新時は中国にも何処にも行ったことがなかったから。

「散歩屋のマサ」は六十も半ばをこえた痩せっぽちの男で、犬を散歩に連れだす仕事をしていた。飼主に代って、山下公園とか外人墓地の辺りをコースを決めて八十分もひとめぐりするのだ。

以前、「散歩屋のマサ」は運河の揺れる家に居候していて、川にむかってズボンのチャックを開いた新時に「こらあ、人の家に小便するな」と怒鳴ったのである。

二人の付き合いはそうして始まったのだが、この半年ばかりの間に、マサの顔色はだんだんわるくなって、得意先の飼主も減る一方だという話であった。「あれじゃあ犬が可哀相よ、あの散歩屋、逆に

引きずられているんだもん」と誰かがいいふらしたらしいのだ。

土曜日の午後か、日曜日の遅い朝、海際のベンチで二人は会うたびに、この一週間に食べたうちでいちばんうまかったものの自慢をする。

「海洋軒のチャーシュウメンくったよ。おいしかった」

「メンマがね、もうちょい味が足りないよ」

ほかのことは大抵一発で賛成するのに、食べ物になると必ずひと言いちゃもんをつけるのがマサの癖だった。

「あそこのおやじさん、ラーメン御殿建てたんだよ。知ってる」

ふん。マサは鼻を鳴らした。そんな情報は古い、古いといわんばかりに。

「きいたんだけどさ。東京からだって、わざわざタクシーに乗って、あそこの屋台にくるらしいよ」

「ちょいめん、おかしいと思わないか」

マサは時々自己流のおかしな言葉を使う。ちょいめんというのは、ちょっとばかしの意味だ。

「何がちょいめんだよ」

「うまいラーメンこしらえようとしたら、そんな御殿みたいな家、建つはずないだろう」

「どうしてさ」新時はいった。半分以上わかっていたが、念のために確かめたのである。

「豚の骨をけちって、いいスープができるかい」

「でもさ、万鶴楼なんかに較べるとずっとうまいよ。南京町の一流だぜ、万鶴楼は」

「店の構えで味がきまるのなら、世話ないよ」

マサは指先で自分のこめかみをこづいた。屋台で稼いだラーメン御殿をこっぴどくやっつけるさっきの言葉とは何かしら矛盾しているような感じであったが、新時は黙っていた。

それはそうと小籠湯包を最初に食べた時のことを語ろう。

五年生になったばかりの日曜日、マサは何もいわずついてこいという素振りをした。それから運河沿いの奥まった細長い店に新時を案内すると、でてきたふとっちょの女がまだ注文もきかない先に、「シャオロンタンパオ」と尻上りの声を放ったのだ。

「三人前ね。お願いよ」

わざとらしい女の口調もマサの得意とするところである。お世辞にも清潔とはいえない狭苦しい店で、ほかに客もいなかったが、運ばれてきた「パオの中のパオ」は、それこそ「宮廷の乞食料理」の味がした。

どちらもマサの言葉だが、ずっと昔、中国の皇帝が馬に乗って遠出をした折り、道に迷ってすきっ腹になり、道端でふるまわれた料理がなんともいえず最高の美味であったことから、そう名付けられたというのであった。

もう少しマサの説明を借りると、その「料理」をこしらえたのは、実は乞食たちで、貰い物や拾い物の魚や屑肉、それに野菜をいっしょくたにして、粘土の鎧をかけ焼き上げたものだそうだ。食べる時はむろん粘土を砕いて中身をつまむ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

「目黒のさんまだね」新時は知識のあるところを示した。落語にでてくる「さんまは目黒に限る」というあの話だ。

「ふえっ」マサは突拍子もない声をあげた。「ピーコゲームで鍛えた人は違うね、さすがに」

ピーコゲームとはインベーダーマシンのことだ。シャオロンタンパオをげっというまで食う新時の第一志望はその日に決定した。

プライバシーにタッチしないというのも、二人の間にかわされた暗黙の了解である。それでも長い日のうちには、何かしらあらわれてくるものだ。

マサの名前はとにかく工藤昌之。太平洋戦争中に兵隊で中国戦線にいた。戦後は花屋とパンの店をしていたこともある。「事情があって店を手放した」後は「株をやってさらに大損」したというのが自伝で、「散歩屋」をする前は、運河の運搬船や護岸工事で働いていた。

新時の方は、中学教師の母親と三歳の妹、それにあまり好きになれない、母とおなじ教師の「義理パパ」がいた。本当の父親は彼が幼稚園の頃何処かに去り、どうしてそうなったか、未だにはっきり教えて貰っていない。

何かのきっかけで仕方なく新時の口からそのことが洩れると、マサの機嫌はなぜかいっぺんに上向いた。

かあさんがいってたよ。人の不幸をよろこぶ人間は雪の日に長靴の底が抜けるって。

新時は喉まででかかった言葉を飲み込んだ。かあさんではなく、何かの本で読んだか、それとも自

分の作り話かはっきりしなかったが、まあ止めとこうと思ったのだ。遊覧船に乗ろうかと誘ったり、とうもろこしを食べないかなどといってはしゃぐマサを見ているのがおもしろかったのである。

そしてその日はきた。大桟橋に横づけしようとするノルウェーの客船にタグボートが群がり、珍しくスモッグのない空に工場の煙突が幾本もくっきりと浮かぶ、秋晴れの土曜日であった。

「昼めしは」

「蟹コロッケ」

「冷凍やな」

「当たりしゃりき」

新時はマサの口調に合わせた。

「どうでっしゃろ、運動会に付き合うて貰えまへんやろうか」

マサは時折りの気分で、そんな行かず大阪弁みたいな口をきくのだ。

「運動会」

「川崎の小学校や。あんさんついてきておくんなはらんか。その代りといっちゃ何やけど、シャオロンタンパオをばあーんと張り込みまっせ」

「やめてよ、もう」新時はいった。「気色わるい、ぞくぞくしちゃう」

「ああまた、すんばらしいお言葉」マサはいう。「ぞくぞくしちゃうなんて。こっちまでぞくぞくしちゃうわ」

「嫌だな、おれ、そういうの」
「わりい、わりい」マサは頭を掻いた。「でもよ、シャオロンタンパオの食い放題っていうのは、ちょいめんみりき(魅力)じゃねえかい」
「おごってくれるの、ほんとに」
マサは真新しいジャンパーのポケットを叩いた。理髪店にも行ったらしく、そう思ってみれば、コール天のズボンに筋目さえも入っている。
「あちゃー」新時はいった。「ネクタイ何本の口だな」
伊勢崎町の洋品店でそういう懸賞をだしているのだ。山盛りになったネクタイの本数を当てると、帽子から靴まで全部新品を揃えてくれるのである。
ジャンパーの裏地は赤い格子縞のウールになっていた。わざわざめくってみせるマサの気障な手つき。
川崎市の多摩川に近い小学校に行くまでの途中、電車を降りると、マサは途端にものをいわなくなった。食い放題といったのを後悔しているのかもしれないと思いながら、新時はスキップをまじえながら歩く。こうなった以上、もう取返しはきかないよ。
運動会のざわめきがきこえる道まで近づくと、マサの緊張してぴりぴりした顔が、はた目にも窺えた。先程、電車の中で「知り合いでもいるの、誰か」とたずねた新時に、肩をすくめてみせただけだったのだが。

赤と白い帽子の背後で、あっという間にマサはプログラムを手に入れてきた。校舎の時計は一時五十分。

「あと二つ終るとリレーだ」とマサはいった。

それは学年を縦割りにした対抗リレーで、新時の小学校にはみかけぬものであった。赤、青、黄、白、緑の五組にわかれ、夫々、三年から六年までの男女の選手が走るのだ。三年は男子、四年は女子という具合に。

「白組の四年を見ろ、次に走る」

スタートラインに三年生の選手が並ぶと、マサはかすれた声をだした。

離れているのであまりよくわからなかったが、あまり背の大きくない丸顔の子だ。

競走は開始され、マサのいう四年生の女子は四番目にバトンを受取った。二十メートルも行かぬうちに前の走者を抜き、コーナーに差しかかって、さらに緑の選手に追いつこうとした。その瞬間、相手の肘に弾かれて、白組のバトンは地面に転がる。

「あかん」

その声が悲鳴のようにきこえたので、新時が振向くと、マサは顔をそむけた。

湧き上がる喚声の中に白い帽子は姿勢を立て直したが、その時はもう四番目から十メートルも遅れていた。

「惜しかったな」

マサはものもいわず、バトンを渡すとすぐしゃがみ込んだ選手ひとりを、ただ見つめていた。

「バトンを落とさなかったら、全部抜いていたよ、きっと」

「そうやね……」

声をだそうとして、マサは大きく息を吐いた。変な関係。胸の中のあぶくを新時はそれでも口にできなかった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo